

Title	自我理想の起源：フロイトにおけるメランコリーと同一化の問題
Author(s)	松山, あゆみ
Citation	文明構造論：京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 (2011), 7: 45-62
Issue Date	2011-09-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/147327">http://hdl.handle.net/2433/147327</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 自我理想の起源 —フロイトにおけるメランコリーと同一化の問題—

松 山 あゆみ

### はじめに

ジークムント・フロイト（1856-1939）の精神分析理論において同一化という概念は、その理論の後期に近づくにつれ重要視されるようになっていったが、それは同一化が自我の性格形成の中心的な役割を担っており、さらには自我理想（超自我）発生の原因になっていると考えられるようになったからである。同一化が自我の性格形成に深く関わっていることをフロイトに気づかせたのは、ほかならぬメランコリーという病の考察であった。メランコリーを詳細に考察することがなければ、愛する対象を自我に取り込んで自我を変容させる同一化を発見することはできなかったと言えよう。なぜなら、フロイトはそれ以前にはヒステリーにおける同一化に注目していたからである。

ヒステリー的同一化とは、性的対象であるか否かにかかわらず、その対象との無意識的な共通点を見出して、同じ立場に身を置くことを欲することによってなされる同一化のことである。この同一化は、メランコリーに見られるような対象そのものを取り込む同一化とは違い、対象の個々の行動や神経支配に限られるような部分的な同一化であり、対象のただ一つの特徴しか借りてこないものである。たとえば、フロイトのヒステリー患者、ドーラが父親の咳き込みを真似たように。また、メランコリーにおける同一化では、対象そのものを自我に取り込むため、外界の対象への備給は放棄されるが、ヒステリーにおける同一化では、その備給は保持されたままである。このような同一化からは自我変容が起こらないため、自我の性格の成り立ちを解明することはできないだろう。さらに、自我の性格形成を遡っていくと、個人の最初の同一化、すなわち、太古の父との同一化という自我理想ないし超自我の発生の現場に導かれる。

本稿では、フロイトがメランコリーと同一化の問題に触れている最初期の草稿および後

期の著作を考察することにより、メランコリーにおける同一化の概念が、自我の性格形成だけでなく、自我理想（超自我）の発生にも、非常に深いかかわりを持っていることを明らかにしたい。さらに、自我理想の起源にまで遡ることにより、メランコリーにおける罪責感がどこから来たものなのかを探りたい。

## 1. 草稿 N

メランコリーにおける同一化の問題にフロイトが初めて触れたのは、おそらく、親友ヴィルヘルム・フリース<sup>1</sup>宛の1897年5月31日付けの手紙に添えられた草稿 N においてである。ここには、フロイトのさまざまな着想が無造作に書きとめられている。なかでも重要なのが「衝動 (*Impulse*)」というタイトルがつけられているものである。メランコリーにおける同一化に触れられている箇所を引用しよう。

両親に対する敵対的な衝動（両親が死ねばいいのにという欲望）は、同じく神経症の不可欠な構成要素である。……この衝動が抑圧されるのは、両親に対して同情を寄せるとき、すなわち両親の病気や死のときである。このときに、両親の死について自らを非難したり（いわゆるメランコリー）、報復観念によって両親が背負い込んでいたのと同じ状態でヒステリー的に自らを罰したりすることは、喪の現れである。その際に起こる同一化は、見たところ、一つの思考様式以外の何ものでもなく、その動機を探し求めることは無駄ではない。

この死の欲望は、息子たちにおいては父親に対するものであり、娘たちにおいては母親に対するものであるように思われる。<sup>2</sup>

---

<sup>1</sup> Wilhelm Fliess : ベルリンの耳鼻咽喉科の開業医。フロイトとは1887年、ウィーンで出会い、すぐに意気投合する。彼らの文通は17年に及び、そこから精神分析が生まれ、そして育まれた。1895年以降フロイトは、フリースへの手紙において体系的な自己分析を始め、1896年の父ヤーコブの死を機にエディプスコンプレックスの自覚に至った。

<sup>2</sup> Freud, Sigmund: *Briefe an Wilhelm Fliess 1887-1904*. Jeffrey M. Masson (Hgg.). Frankfurt am Main 1986, S. 267. 引用は拙訳によるが、河田晃訳を参照し適宜訳語に変更を加えた。河田訳では Wunsch は「願望」と訳され、Trauer は「哀悼」と訳されているが、本稿では、日本語版のフロイト全集に倣い、Wunsch を「欲望」と訳し、Trauer を「喪」と訳すことにする。また括弧内は原著によるものである。

ここで示されている「息子たちが父親に向ける死の欲望と娘たちが母親に向ける死の欲望」は、フロイト全集の標準版の英訳者であるジェームズ・ストレイチが指摘しているように、エディプスコンプレックスをフロイトが自覚するに至る前触れである。<sup>3</sup> そしてこの死の欲望が抑圧されて生じる自己非難の状態をフロイトはメランコリーと呼び、この自己非難もヒステリー的な自己処罰も、両親の死という対象喪失による哀しみの現れ、すなわち「喪の現れ」だと述べた。ここでは、対象喪失から同一化へと至るメランコリーの過程がすでに示されており、また、死の欲望による両親との同一化というエディプスコンプレックスに関わる問題も提起されている。しかし、これらの問題は長い間放置され、草稿 N の 20 年後の論稿「喪とメランコリー」においてようやく、メランコリーにおける同一化の機制についての考察が深められ、さらに 1920 年以降の著作において、同一化は自我の性格形成および自我理想（超自我）発生にとって欠かせない概念となるのである。

## 2. 自我の性格形成

1917 年の論稿「喪とメランコリー」でフロイトがメランコリー患者に見た同一化は、ヒステリー的同一化とは異なる「ナルシシズム的同一化」であった。それは次のようなものである。患者は、愛する対象を喪失すると、対象へ向けていたリビドを自我に引き戻し、対象選択からナルシシズムへの退行が起こる。このとき自我は対象を取り込み同一化する。そしてこの同一化により、患者は喪失した愛の対象を自我の中に再建して対象愛の代理を作り上げるのである。

メランコリーのこの同一化の問題をフロイトは、1921 年の著作『集団心理学と自我分析』で改めて取り上げ、さらにその 2 年後の著作『自我とエス』において論じ直すことに

---

<sup>3</sup> Cf. Freud, Sigmund: *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, vol. XIV, tr. under the general editorship of James Strachey in collaboration with Anna Freud, assisted by Alix Strachey and Alan Tyson. London 1957, p. 239. フロイトが両親への死の欲望に気づいたきっかけは、草稿 N が書かれる少し前の父ヤーコブの死だと考えられる。フロイトはこの草稿を書いたすぐ後にエディプスコンプレックスを自覚するが、いわゆる誘惑理論の破棄からエディプスコンプレックスへの転回は、さまざまなフロイトの伝記作家たちによって精神分析の偉大な業績のひとつだとみなされている。Cf. Jones, Ernest: *Sigmund Freud. Life and Work, vol. 1. The Young Freud 1856-1900*. London 1953, p. 313. エレンベルガー、アンリ『無意識の発見——力動精神医学発達史』下巻（木村敏／中井久夫 監訳、弘文堂 1980 年）、83 頁参照。シュール、マックス『フロイト 生と死』上巻（安田一郎／岸田秀 訳、誠信書房 1978 年）、122～123 頁参照。しかしながら、誘惑理論のほうに正当性を認める次のような研究もある。クリュル、マリアンネ『フロイトとその父』（水野節夫／山下公子 訳、思索社 1987 年）。

なる。フロイトはまず「喪とメランコリー」の論稿を振り返り、自らの論を反省している。

当時〔1917年〕はまだ、この過程〔対象備給が同一化によって取って替わられるというメランコリーの過程〕の十全な意義を自覚していなかったし、この過程がいか

に頻繁なものか、また典型的なものかということもわかっていなかった。<sup>4</sup>

こうした自省のもと、フロイトは、同一化と対象備給とがリビド発達の第一段階である口唇期においては区別できない状態にあると述べ、この著作において新たに導入したエスの概念を用いてメランコリーにおける同一化を分析し直している。

口唇期より後の時期になり、エスが性愛的追求を欲求として感じ取るようになると、対象備給が行われるが、性的対象を断念しなければならない場合には、その代わりに自我変容 (Ichveränderung) が生じるとフロイトは考えた。ここで言う自我変容とは、すなわち、メランコリーの場合のようにその対象を自我の中に打ち立てることである。メランコリーの場合では、口唇期への退行が起こることから生じる同一化を通して自我の中に対象を再建することにより、自我は現実の対象を放棄することができるのだが、フロイトはこうした考えをさらに発展させ、同一化がそもそもエスにその対象を断念させる条件になっているのではないかと推察した。またフロイトは、このような同一化の過程は早期の成長段階において頻繁に起こるものであり、自我の性格というものはかつて断念された対象備給の沈殿であるかもしれないと述べ、その沈殿には対象選択の歴史が刻まれているという考えを示したのである。<sup>5</sup>

しかし別の観点から見ると、同一化、すなわち、性愛的な対象選択を自我変容に転化することは、自我がエスを制御し、エスとの関係を深めることができる一つの方策だという

---

<sup>4</sup> Freud, Sigmund: *Das Ich und das Es* (1923). In: *Gesammelte Werke*, Bd. XIII, Anna Freud et al. (Hgg.). London 1940, S. 256f. 以下、フロイトの全集は *G. W.* と略記する。また、本稿における引用はすべて拙訳によるが、翻訳の際に日本語版フロイト全集を参照した。亀甲括弧内は引用者による補足。

<sup>5</sup> Vgl. ebd. 断念された対象備給のすべてが沈殿していくわけではなく、ある人の性格が対象選択の歴史からの影響をどの程度まではねつけるか、あるいは受け入れるか、という耐性の強さも考慮に入れなければならないとフロイトは続けて述べている。また、ここで対象選択の歴史に関する例として挙げられているのは、恋愛経験が豊富な女性の性格特徴のうちに対象備給のさまざまな残留物が見出せるというものである。

ことにもなるとフロイトは指摘した。エスとの関係を深めるとはつまり、リビードの貯蔵庫であるエスからそのエネルギーを自我へ向けさせることだと考えられる。この自我の方策をフロイトは次のように説明している。

自我は、対象の特徴を帯びると、いわば自らを愛の対象としてエスに押し付け、エスの対象喪失を埋め合わせようとして、こう言うのである。「ごらん、おまえは私も愛することができるのだよ、私は対象にこんなにも似ているのだから」と。<sup>6</sup>

このような方策を採ることで、対象リビードは同一化によってナルシズム的なリビードへ転化され、そのリビードは自我に注ぎ込まれる。<sup>7</sup> このとき、性目標の断念や脱性化 (Desexualisierung) といった一種の昇華 (Sublimierung) が伴っているとフロイトは明言し、そしてこのように推論した。「あらゆる昇華は自我の仲介によってなされ、自我がまず性的な対象リビードをナルシズム的なリビードに変身させ、それからナルシズム的なリビードに別の目標を設定するのではないか」<sup>8</sup> と。この推論からさらにフロイトが示唆したことは、このリビードの変身が混合している二つの欲動 (エロースと死の欲動) の分離を引き起こすということだが、このことはメランコリー患者に見られるサディズムと密接な関係を持っている。しかしながら、これに関しては、ここではこれ以上立ち入らず、後に (第6節で) 改めて論じることにして。

本節で見てきた同一化は、対象選択が断念されるたびごとに生じるように思われるが、フロイトによると、同一化によって自我に取り込まれた対象の影響に逆らおうとする耐性を後に性格は身につけるようになり、自我に同一化された対象同士の折り合いがつかなくなるような病的な状態をうまく免れる。<sup>9</sup> しかしながら、この耐性がいかに形成されよう

---

<sup>6</sup> Ebd., S. 258.

<sup>7</sup> この状態はすでに「ナルシズムの導入にむけて」で論じられた二次ナルシズムの状態であるが、これは「喪とメランコリー」においてメランコリーに陥った患者の状態としても指摘されている。しかしながら、『自我とエス』では、こうしたナルシズム的同一化を自我の性格形成に寄与するものでもあるとしてしまったため、ナルシズム的疾患としてのメランコリーの特殊性が薄れてしまっている。

<sup>8</sup> Ebd., S. 258.

<sup>9</sup> 病的な状態として例に挙がっているのは自我の分裂状態や多重人格であるが、対象の影響に対する耐性を性格がいかにして身につけるのかについては、フロイトは何の説明も付していない。

とも、幼児期初期に生じた同一化の影響は非常に広範かつ持続的なものになる。このことは、自我理想の発生に深く関わっており、自我理想の背後には個人の最初の同一化、すなわち太古の時期の父親との同一化が潜んでいるとフロイトは言う。<sup>10</sup>

では、同一化によって自我理想はどのように発生するのだろうか。この問題に取り組む前に、布石として自我理想という術語の変遷を追うことにしたい。

### 3. 自我理想概念の変遷

自我理想概念の変遷に深く関わっている論稿および著作は以下の四つである。

1. 「ナルシズムの導入にむけて」(1914 年発表)
2. 「喪とメランコリー」(1915 年執筆、1917 年発表)
3. 『集団心理学と自我分析』(1921 年発表)
4. 『自我とエス』(1923 年発表)

これらのうち「喪とメランコリー」においてのみ、「自我理想」という術語の使用は見られない。しかしながらこの論稿を経ることによって自我理想概念は、より包括的な概念に変更されたと考えられる。本節では、このことを論証すべく、それぞれの論稿および著作における自我理想概念に関する記述の異同を精査していくことにする。

自我理想という術語は 1914 年の論稿「ナルシズムの導入にむけて」において初めて用いられた。この論稿において自我理想は、幼年期に喪失したナルシズムの代理となるものであり、人間は自我理想という新たな形式のもとで幼児期に享受していたナルシズム的完全性を再び得ようとする。幼年期には自分が自分自身の理想であるのだが、人間は成長するにつれ、判断力の目覚めやさまざまな警告によってこのようなナルシズムをしだいに喪失していく。しかし、人間は一度享受した満足を断念することはできないので、ナルシズムの代理として自我理想を形成するのである。<sup>11</sup>

そして自我理想を見張る番人に任命されているのが良心 (Gewissen) であり、それはまず両親の批判が身体化され、ついで社会の批判が身体化されたものである。外界からのこれらの批判的な声が自我理想の形成を刺激する。<sup>12</sup> このような良心と自我理想との関係を

---

<sup>10</sup> Vgl. ebd., S. 258f.

<sup>11</sup> Vgl. Freud, Sigmund: Zur Einführung des Narzissmus (1914). In: *G. W.*, Bd. X, S. 161.

<sup>12</sup> Vgl. ebd., S. 163.

フロイトはこう言い表している。

それ〔特別な心的審級〕は、自我理想から来るナルシシズム的満足を確保するよう見張るという任務を果たし、こうした意図を持って現在の自我を絶え間なく観察〔注察〕して理想と比較する。……われわれが良心と呼ぶものがこの特性を満たしている。<sup>13</sup>

ここでは、自我理想という尺度に照らして、特別な心的審級である良心が自我を観察するということが述べられており、自我理想と特別な心的審級である良心は区別されていることが読み取れる。このように 1914 年の論稿「ナルシシズムの導入にむけて」では区別されていた自我理想と特別な心的審級は、1921 年の著作『集団心理学と自我分析』においてはその区別がなくなる。区別がなくなったというよりは、自我理想に特別な心的審級が吸収されてしまう。さらに自我理想という概念は、1923 年の著書『自我とエス』で、エス、自我とともに心的装置を構成する一つの審級である「超自我」と並べて論じられ、ほとんど同一のものとして扱われるようになる。

フロイトは、『集団心理学と自我分析』において、1917 年（1915 年執筆）の論稿「喪とメランコリー」を振り返り、この論稿では「特別な審級」としか呼ばれておらず、名前が与えられていなかった、自我から分割された批判的な審級を何の躊躇もなく「自我理想」と呼んでいる。まるでメランコリー論においても、そう名付けていたかのように。しかしこのメランコリー論では自我理想という術語はまったく使用されていない。1914 年のナルシシズム論においてすでに自我理想という概念は提出されていたのだから、翌年に執筆されたメランコリー論で当然、その名を持ち出してもよいはずであるのに。

なぜフロイトは何事もなかったかのように「特別な審級」を「自我理想」と呼び変えてしまったのだろうか。この謎を解明すべく、1917 年の論稿「喪とメランコリー」で描かれている「特別な審級」と 1921 年の著作『集団心理学と自我分析』で描かれている「自我理想」との差異を見ていくことにしよう。

論稿「喪とメランコリー」でフロイトがメランコリー患者の分析から想定した「特別な審級」は、分割され、二つの部分に分かれた自我のうち、批判的にもう一方の自我に対峙

<sup>13</sup> Ebd., S. 162. 亀甲括弧内は引用者による補足。「観察〔注察〕する」の原語は beobachten である。「注察」という語を補ったのは「注察妄想」を念頭に置いたためである。



する自我であった。それは良心とも呼ばれ、「現実の吟味 (Realitätsprüfung)」と「意識の検閲 (Bewusstseinszensur)」とともに自我の大きな機関に属するものとされた。それに対し、『集団心理学と自我分析』で登場した「自我理想」は、批判的な審級を含んだものであり、「夢の検閲 (Traumzensur)」、「自己観察 (Selbstbeobachtung)」、「道徳的良心 (moralisches Gewissen)」、「抑圧の際の主たる影響 (Haupteinfluss bei der Verdrängung)」がその機能として与えられている。

また、「喪とメランコリー」では、ナルシズム論で見られたような「ナルシズムの代理」としての役割を果たすものにはまったく触れられていないが、『集団心理学と自我分析』においては、「幼児の自我が自足していた根源的なナルシズムの相続人」<sup>14</sup>であるものが自我理想だとされている。そしてそれは、とりわけ両親の権威に由来し、周囲の影響を受けつつ周囲からの自我への要請をしだいに受け入れていくものである。しかし、自我はその要請につねに応えられるわけではないので、人は自分の自我に満足できない場合でも、自我とは区別された自我理想のなかに満足を見出せるようになる。このような「ナルシズムの相続人」としての自我理想の説明は、1914年のナルシズム論でのその語についての説明とただ一点を除いては一致している。その一点とは、自我理想が両親の権威に由来するという記述である。ナルシズム論においては、両親の権威すなわち両親の批判的な声に由来するのは「特別な心的審級」のほうだった。この批判的な側面のみを備えたものが「特別な審級」としてメランコリー論へ引き継がれ、そこではナルシズムの代理である「自我理想」は一旦姿を消すことになり、その結果「特別な審級」との違いが曖昧になってしまった。

したがって、1921年の著作『集団心理学と自我分析』における「自我理想」は、1914年の論稿「ナルシズムの導入にむけて」に初出した「自我理想」および「特別な心的審級」と1917年の論稿「喪とメランコリー」の「特別な審級」とを統合したものであると言える。『集団心理学と自我分析』で自我理想の出自を両親としたので、「特別な審級」も「自我理想」も混同され、メランコリー論で「特別な審級」と呼んでいたものを『集団心理学と自我分析』では「自我理想」と呼び変えたのではないだろうか。そしてさらに自我理想概念は『自我とエス』における超自我概念とほぼ同一視されることになるのである。

---

<sup>14</sup> Freud, Sigmund: *Massenpsychologie und Ich-Analyse* (1921). In: *G. W.*, Bd. XIII, S. 121.

本節で論証してきたことをわかりやすく表にすると以下ようになる。

自我理想概念の変遷に深く関わる 論稿および著作	自我理想概念とそれに深く関わる その他の概念を式で表したもの
「ナルシズムの導入にむけて」(1914)	特別な心的審級＝良心 良心＝両親の批判が身体化したもの 特別な心的審級≠自我理想 自我理想＝ナルシズムの代理
「喪とメランコリー」(1917 [1915])	特別な審級＝批判的審級＝良心
『集団心理学と自我分析』(1921)	批判的審級＝良心 自我理想≧良心 自我理想＝両親の権威に由来するもの 自我理想＝ナルシズムの相続人
『自我とエス』(1923)	自我理想≧超自我

上に掲げた表の内容を簡略化すると次のようになる。

〔ナルシズム論における自我理想ならびに特別な心的審級〕  
 ＋〔メランコリー論における特別な審級〕  
 ＝〔『集団心理学と自我分析』における自我理想〕  
 ≧〔『自我とエス』における超自我〕

繰り返しになるが結論はこうである。すなわち、ナルシズム論において両親の批判的な声を身体化した「特別な心的審級（良心）」とナルシズムの代理である「自我理想」は区別されたものだったが、その次にメランコリー論において批判的審級である特別な審級（良心）という概念のみが用いられ、自我理想概念がいったん棚上げされてその役割が曖昧になったことにより、『集団心理学と自我分析』においてこれら三つの概念は統合され、一つの包括的な概念となりえた。つまりそれは、両親の権威に由来する批判的審級である良心を内包し、かつナルシズムの相続人でもある「自我理想」という概念になったのである。では、自我理想は両親からいかにして発生するのだろうか。

#### 4. 自我理想の発生

自我理想の発生については、すでに取り上げてきた著作『集団心理学と自我分析』ならびに『自我とエス』で詳述されている。両著作における説明は重複する部分が多々あるため、以下にまとめて見ていくことにしよう。

精神分析において同一化は、他の人格との感情的な結びつき（感情的拘束）の最初期の表れであり、エディプスコンプレクスの前史において一つの役割を果たす。男児が父親のようになりたいと思い、父親の代わりを務めたいと思うとき、その子は父親を自分の理想とする。そして、男児は模範として選んだ父親の自我を模倣して自らの自我を形成しようとする。このように男児は父親と同一化するのである。これと同時に、あるいはひょっとしたらそれ以前に、男児は母親を愛の対象として選択する。つまり、男児において、母親への性的な対象備給と父親への同一化という二つの結びつきが併存することになる。やがて男児は、母親に対する性的欲望が強くなり、父親が邪魔者であるということに気づく。こうしてエディプスコンプレクスが発生することになる。

そうすると、父親との同一化は、敵対的な色調を帯び始め、母親との関係においても父親に取って代わりたいという欲望（Wunsch）と一致するようになる。このように同一化は始めからアンビヴァレントなものであり、口唇期に見られる体内化を原型とするものである。口唇期においては欲される対象は食べられることにより体内化され、そのものとしては破壊されてしまう。<sup>15</sup>

ここまでは『集団心理学と自我分析』でも『自我とエス』でもフロイトの説明は何ら変わるところがない。しかしここから二つの著作の内容の違いを見せている。『集団心理学と自我分析』では神経症の症状形成における同一化の問題に話が移っていくが、それに対して『自我とエス』ではエディプスコンプレクスの崩壊後の父母との同一化の問題から二重のエディプスコンプレクスの問題へと向かい、その内容は複雑怪奇なものになっていく。しかしながら、いかに複雑であろうとも、これらの問題は自我理想ないし超自我の発生にとって重要なものである。それゆえ、続けてフロイトの記述を追うことにしよう。

エディプスコンプレクスはやがて崩壊することになるが、その際、母親に対する対象備給は断念される。その代わりに、母親との同一化が生じるか、あるいは父親との同一化が

---

<sup>15</sup> Vgl. Freud(1921), S. 115f. Freud(1923), S. 260.

いっそう強められる。父親との最初の（一次）同一化は、直接的で無媒介的なものであり、いかなる対象備給にも先立つ。<sup>16</sup> 父親との一次同一化と父親を対象として選択することは異なっており、父親は、前者においては「そうありたい存在」であり、後者では「持ちたい存在」である。<sup>17</sup> この父との同一化の強化がよりノーマルなものだと見なされ、男児の性格において男性性が強まると考えられる。同様に女兒の場合も、母との同一化が強化され、女兒の女性的性格を確立する。<sup>18</sup>

ところがフロイトはこの見解を述べた直後に自ら修正を加えている。すなわち、このような単一のエディプスコンプレクスは単純化され図式化されたものでしかなく、分析において実際に多く見られるのは、もともとある子供の両性性<sup>19</sup> に左右されるような、陰も陽も併せ持った二重のエディプスコンプレクス、つまり、より完全なエディプスコンプレクスである、と言い直したのである。さらに彼は、この二重のエディプスコンプレクスに関する説明を補足している。それは、男児が父親に対しアンビヴァレントな態度を取り、母親に対して情愛的な対象選択を行うのと同時に、女兒のようにも振る舞って、父親に情愛的な態度を見せ、母親に対して敵対的な態度を示すことである。最後にフロイトはこう結論する。

よって、エディプスコンプレクスに支配された性的発達段階の最も一般的な結果として、自我のうちの沈殿物を仮定しうる。それは、何らかのかたちで両立することができる、これら二つの同一化〔父同一化と母同一化〕を生み出すものである。こうして生じた自我変容は、その特権的地位を保ち、自我理想ないし超自我として、それ以外の自我の内容に対立するようになる。<sup>20</sup>

本節では以上のように、自我理想の発生についてのフロイトによる説明をつぶさに見てきたが、この説明は大きな問題を孕んでいる。フロイトのテキストの厳密な読解がなされた名著『フロイトを読む』（1965）においてポール・リクールは次のように指摘している。

---

<sup>16</sup> Vgl. Freud(1923), S. 259f.

<sup>17</sup> Vgl. Freud(1921), S. 116.

<sup>18</sup> Vgl. Freud(1923), S. 260.

<sup>19</sup> 両性性という考えはもともとフリースから影響を受けたものである。

<sup>20</sup> Freud(1923), S. 262. 強調は原著によるものであり、亀甲括弧内は引用者による補足である。

同一化が口唇期に起源を持つものならば、一次同一化は父のようにありたい欲望ではなく、父を持ちたい欲望なのではないか、と。なぜならば、口唇期においては対象を取り込み体内化することが目指されるからである。この指摘に続けてリクールは、フロイトが二重の、より完全なエディプスコンプレックスの論を持ち出してきても、父母との同一化と対象関係（なりたい存在と持ちたい存在）との区別は明らかにはされていないと批判した。<sup>21</sup>

リクールのこれらの指摘以外にもここには多くの問題点がある。一次同一化はいかなる対象備給にも先立つものだとフロイトは断言しているが、それは直前の自らの言及と矛盾している。というのも、父親と同一化するのと同時にあるいはひょっとしたらそれ以前に母親を愛の対象として選択するということも述べているからである。また、フロイトによると、同一化の主体である自我は、リビードの貯蔵庫であるエスから分化したものであるから、自我理想ないし超自我の形成の際に対象備給に先立つ無媒介的な同一化がなされることはありえないのではないだろうか。この疑問は、『自我とエス』の第5章「自我の依存性」の冒頭を見ても、浮かび上がってくるものである。すなわちそれは「自我の大部分がエスの断念された備給を引き継いで生じる同一化から形成され、これらの同一化のうちの最初のものが通例、自我の中の特別な審級として振る舞い、超自我として自我に対立する」<sup>22</sup> という記述である。ここからも、自我理想ないし超自我が対象備給の断念から生じた同一化、すなわちナルシズム的同一化によって発生したものであると考えられる。さらに、こうも言えるのではないだろうか。一次同一化もヒステリー的同一化も、全体的であれ部分的であれ、対象を自我に取り込むという点でメランコリーにおけるナルシズム的同一化と一致しているのだから、<sup>23</sup> 結局はどの同一化も体内化という共通の基盤を持っている、と。ここでは謎が謎を呼ぶばかりであるが、本稿ではこれらの問題にこれ以上立ち入らず問題提起にとどめるだけにし、メランコリーにとって重要な意味を持つ自我理想ないし超自我の「二重の相貌 (Doppelangesicht)」というものを見ていくことにしよう。

---

<sup>21</sup> リクール、ポール『フロイトを読む』（久米博 訳、新曜社 1982 年）、232-237 頁参照。

<sup>22</sup> Freud(1923), S. 277.

<sup>23</sup> リクールは、ヒステリー患者であるドーラが父の咳き込みを真似たのを、「喪とメランコリー」に記述されているナルシズム的同一化であると指摘している。リクール、前掲訳書、232 頁参照。

## 5. 自我理想ないし超自我の二重の相貌

フロイトによると、自我理想ないし超自我は、たんにエスの最初の対象選択の残滓であるだけでなく、この対象選択に対する反動形成という意味も持っている。自我理想の自我に対する関係は、父のようにあるべし、という勧告のみならず、父のようにあってはならぬ、という禁止も含んでおり、多くのことを父だけの特権として留保している。自我理想がこうした理想と禁止の二重の相貌を持っているのは、かつて自我理想がエディプスコンプレックスの抑圧に尽力したという事実、いやそれどころか、この急変のおかげで初めて生まれ出たという事実に由来する。エディプス的欲望の実現を阻む者は父親であるから、幼い自我は自らを強くしてこの抑圧の仕事を実行するために、自らのうちにその阻止者、すなわち、エディプス的欲望を阻止する者を打ち立てねばならなかった。幼い自我はそのための力を父親から借用したのだが、この借用がきわめて重大な影響を持つ行為となる。すなわち、父から借用したものがそれが自我理想となり、これは父としての性格を保持し、後には良心としていっそう厳格になり、「無意識的な罪責感 (unbewusstes Schuldgefühl)」として自我を支配するのである。<sup>24</sup>

フロイトがこのように反動形成を自我理想成立のために導入したのは、一次同一化および対象選択断念後の同一化による自我理想発生の説明だけでは、メランコリー患者に見られる自我理想の苛酷さが不可思議なものになってしまうからだと考えられる。<sup>25</sup> 反動形成による自我理想の禁止の相貌も、メランコリーという病がフロイトのなかで問題にならなければ、理論化されることはなかったかもしれない。さらにこの反動形成によってとりあえずは説明されたかに見える自我理想の苛酷さ、その攻撃性を、フロイトは最終的には「死の欲動」という新たな概念を自らのメタサイコロジーに導入することによって説明し直すことになる。この自我理想の苛酷さの大本である「死の欲動」は、メランコリーにおいてどのように働くのかを次に取り上げたい。

## 6. 死の欲動の集積場としての自我理想

メランコリー患者において自我理想がどのような相貌を見せるかということ、自我理想は、

---

<sup>24</sup> Vgl. Freud(1923), S. 262f.

<sup>25</sup> 超自我の苛酷さの説明としてフロイトが反動形成を持ち出したという議論はリクールにおいてもなされている。リクール、前掲訳書、237 頁以下参照。

強力になって意識をのっとり、個人が持っているすべてのサディズムを自分のものにしたかのように、自我に対して異常なほどの苛酷さと厳格さを向けることになる。サディズムに関するフロイトの見解に従えば、自我理想の中に破壊的成分が堆積して、これが、自我に対して矛先を向けたということになる。この場合、自我理想の中で「死の欲動」が純粹培養された状態になっているのである。すなわち自我理想は死の欲動の集積場となる。<sup>26</sup>

どうしてこのような状態が作り出されるのであろうか。フロイトは、欲動制限、すなわち道徳性という見地からこの問いに答えようとした。まずエスはまったく無道徳であり、そして自我は道徳的であろうと努め、自我理想は過度に道徳的であり、しかも、エスにしか見られないほどの残忍性を発揮する。人間が外界に対する攻撃性を制限すればするほど、自我に対する自我理想の攻撃傾向は強まっていくのである。<sup>27</sup>

そして次のようにフロイトは仮定せざるをえなくなる。自我理想は父との同一化によって生まれたものであるから、この種の同一化には脱性化ないし昇華という性格が付随しており、こうした転化が生じる際には欲動分離も同時に起こる、と。また、昇華がなされた後には、エロース的成分は、追加されたすべての破壊欲動を拘束する力をもはや持っておらず、破壊欲動は攻撃傾向や破壊傾向として野放し状態になるのだ、と。<sup>28</sup>

このような状態になった自我理想は、怒り狂い強烈に自我を批判するのだが、自我は自責の念に駆られ、自ら進んで懲罰を受けようとする。自我が躁病へと転化して身を守らない限り、自我理想は往々にして自我を死へと駆り立てるのである。<sup>29</sup>

メランコリーの自殺企図の中に見出せる死の不安は、自我が自分は自我理想に愛されておらず、憎まれ責められていると感じることである。この不安ゆえに自我は自らを放棄するのである。自我にとって生（Leben）とは自我理想によって愛されることである。なぜなら自我理想はかつて父が持っていた庇護的・救済的機能を代表するものだからである。このように自我は自我理想に依存しているために、自我は自我理想から責められることによってあらゆる庇護から見放されたと感じ、自らを死に追いやるのである。<sup>30</sup>

メランコリー患者の死の不安は自我理想から愛されないことに起因するものだとここ

---

<sup>26</sup> Vgl. Freud(1923), S. 283.

<sup>27</sup> Vgl. ebd., S. 284.

<sup>28</sup> Vgl. ebd., S. 284f.

<sup>29</sup> Vgl. ebd., S. 283.

<sup>30</sup> Vgl. ebd., S. 288.

でフロイトは述べているが、じつは、この死の不安と、自我理想に刻印されている「無意識的な罪責感」とは、密接に結びついた問題である。最後にこの問題を取り上げることにしよう。

## 7. 無意識的な罪責感

フロイトの著作において「無意識的な罪責感」に関する考察が最もよくなされているのは、1930 年の著作『文化の中の居心地悪さ』においてである。<sup>31</sup> ここでは「無意識的な罪責感」のみならず「死の欲動」や「超自我の系統発生の起源」についても詳細に論じられている。

フロイトによると、人間は、死の欲動を代表する攻撃欲動 (Aggressionstrieb) というものを生まれつき持っており、幼児はこの欲動を父親に向けようとする。しかし、自分より優位に立つ父に向けることは不可能であるゆえに、その欲動は断念されなければならない。攻撃したくとも歯が立たない父という権威を幼児は自らのうちに取り込み、これが超自我となる。そして、幼児がもともと父に向けたかった攻撃性をすべて自らのうちに保持することになる。ここで重要なことは、断念した攻撃欲動は自分へと振り向けなければならないということである。そしてこの欲動断念が罪責感として感じられるようになる。<sup>32</sup>

ここではある疑問が湧いてくる。フロイトの推論では、対象へ向けられたリビドが断念され自らに引き戻される際には、一種の昇華が伴い、対象リビドはナルシシズムのリビドに転化されるということだったが、それに対して、攻撃欲動の断念の際には、何の変化も生じないのだろうか。つまり、攻撃欲動の昇華というものは考えられないのだろうか。これと同じ疑問をかつて抱いた女性がいる。それは、フロイトの弟子、マリー・ボナバルトである。彼女の疑問に対してフロイトは 1937 年 5 月 27 日付の手紙で答えている。

変化をもたらすあらゆる活動は、ある程度、破壊的なので、一部の欲動をそのもとの破壊目標から向け変えています。われわれが知っているように、性欲動ですら、ある程度の攻撃性がなくては行動できません。それゆえ、二つの欲動の調和のとれた混合

<sup>31</sup> ただし『文化の中の居心地悪さ』では、メランコリーに対する言及はまったく見られない。そしてこの著作では自我理想ではなく、超自我という術語がもっぱら用いられている。

<sup>32</sup> Vgl. Freud, Sigmund: *Das Unbehagen in der Kultur* (1930 [1929]). In: *G. W.*, Bd. XIV, S. 488f.



のうちに、破壊欲動の部分的な昇華があるのです。<sup>33</sup>

ここでは破壊欲動は、エロス（性欲動）との混合によってでしか昇華されないことが読み取れる。すなわち、破壊欲動単独では部分的にも昇華されないということが示されている。これに続けてフロイトは、攻撃欲動ないし破壊欲動の昇華に関するさまざまな可能性を列挙するのだが、どれも正しくないかもしれないと消極的なコメントを残している。結局フロイトはこの問題をこれ以上追及できなかったが、これは、後に自らの学派をなしたメラニー・クラインに引き継がれていくことになる。クラインは、ある女性の芸術作品の創造衝動の根底にサディスティックな破壊願望を見て取り、この創造行為が自らの破壊願望から発する不安を鎮めることができるということを指摘したのである。<sup>34</sup>

話が少し脱線してしまったので、ここでフロイトにおける欲動断念の問題に話を戻そう。先に触れたことだが、フロイトは欲動断念が罪責感として感じられるようになる述べた。だが、なぜ攻撃欲動の断念が罪責感になるのだろうか。昇華の問題とは違い、この疑問に対しては、フロイトはしっかりと答えてくれている。すなわち、超自我の系統発生上の模範である原父を持ち出して答えてくれるのである。原父にまつわる話は『トーテムとタブー』（1913）が初出である。それは、暴力的な原父を兄弟たちで殴り殺し食べつくしたという神話のことである。彼らは原父を殺害することにより攻撃欲動を満足させた。しかしながら、この原父は、彼らにとって、羨望されるとともに畏怖される模範像でもあった。彼らは父を憎んでもいたが、愛してもいたのである。彼らが父に抱いていたのは愛と憎しみのアンビヴァレンツだったのだ。彼らが父を殺害したあと、父に対する愛の側面が彼らの前面に現れ、それは後悔となって罪責感をもたらす。そして父との同一化によって超自我を打ち立て、父に発した攻撃欲動の懲罰として、この超自我に父と同じ機能を与え、二度とこのようなことが起こらぬようにしたのである。父に対する攻撃欲動は後の世代にも繰り返し現れたので、罪責感もそのまま存在し続け、この攻撃欲動は押さえつけられて、

---

<sup>33</sup> Jones, Ernest: *Sigmund Freud. Life and Work, vol. 3. The Last Phase 1919-1939*. New York 1957, p. 464.

<sup>34</sup> Cf. Klein, Melanie: *Infantile Anxiety-Situations Reflected in a Work of Art and in the Creative Impulse*(1929). In: *The Writing of Melanie Klein, vol. I. Love, Guilt and Reparation, and Other Works 1921-1945*. New York 1975, p. 218.

超自我に委ねられるたびに罪責感は増大していくことになった。<sup>35</sup> これが無意識的な罪責感の正体である。フロイト曰く、「罪責感のエロースと破壊欲動ないし死の欲動との永遠の闘いであるアンビヴァレントな葛藤の表現」<sup>36</sup> である。

原父殺害の神話を踏まえて改めてメランコリーの機制を見直すと、新たな側面が見えてくる。メランコリーにおいて特徴的なのは、愛と憎しみのアンビヴァレンツだったが、これはまさに兄弟たちが原父に抱いていたものである。メランコリーに陥る者は、愛と憎しみのアンビヴァレンツにより、対象を同一化するが、その際にエロースは脱性化されてしまい、破壊欲動が野放しになる。この破壊欲動をエロース的成分と混合させ無害なものにするか、外界に逃すかしないかぎり、超自我のうちで死の欲動が純粹培養されてしまう。さらにこの超自我は太古の時期の父親との同一化によって罪責感が引き継がれたものであるので、超自我と自我との葛藤によって引き起こされるメランコリーにおいては、太古の時期から連綿と続く罪責感を一身に引き受けることになるのである。また、超自我の発生から罪責感が付きまとうものであるのならば、メランコリーという病の本質は、人類そのものの父との葛藤における苦しみである。逆に言うと、原父殺害による超自我発生のと時からすでに人類は罪責感というメランコリーの火種を抱えているということになるのではないだろうか。

## むすびにかえて

本稿では、フロイトの最初期の草稿および後期の著作におけるメランコリーと同一化の概念の記述を追うことにより、この概念が自我の性格形成だけでなく、自我理想（超自我）の発生にも、きわめて深く関わっていることを明らかにしてきた。これまでで論じてきたように、自我の性格形成ならびに自我理想の発生には、対象備給の断念から生じる「ナルシズム的同一化」が不可欠である。この同一化は、対象を取り込んで自我の中にその代理を形成するものであり、メランコリーという病の考察からフロイトが見出したものである。この発見がなかったならば、自我理想も攻撃性も、フロイトによってその起源が探究されることはなかっただろう。この探求によって、自我理想の起源が原父殺害による同一化にあることが明らかにされたのである。このことから逆に、自我理想に刻印された殺人

---

<sup>35</sup> Vgl. Freud(1930 [1929]), S. 490ff.

<sup>36</sup> Ebd., S. 492.

の罪の意識、つまり罪責感がメランコリーの火種になっているのではないかという推論が  
成り立つ。そしてこの推論は、いかにして人は自らの死の欲動（攻撃欲動）を処理できる  
ようになるのかという精神分析の課題を用意するものである。じつはフロイトは『自我と  
エス』の第5章でその処理の仕方を語っている。一つは、エロース的成分と混合させて無  
害にする仕方であり、もう一つは、攻撃というかたちで外界にそらす仕方である。エロー  
ス的成分との混同による処理の仕方は、マリー・ボナパルトに宛てた手紙において示唆さ  
れていた攻撃欲動の昇華のかたちと重なるものである。残念ながらフロイトは、攻撃欲動  
の昇華の可能性をほのめかしただけで、この問題の解決を図ることはなかった。攻撃欲動  
の問題の追及は、メラニー・クラインへと引き継がれることになる。彼女は破壊願望を創  
造衝動の根底に見て取り、攻撃欲動の問題に新たな光を投げかけたのである。クラインに  
おける攻撃欲動と創造衝動の問題は筆者の今後の課題としたい。